

私が見たムガル帝国の光と影、そして愛と政争

(本稿はJUDI報告2008の一部である)

小浪悠紀子

はじめに

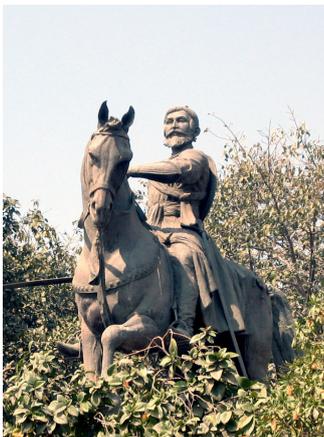
今回の「インド都市建築視察の旅」に、夫のおまけで加えていただいた。私は17年前にインドのダーズリンで開催されたシンポジウムに招待され、参加したことがある。何も知らないでエア・インディアでカルカッタ（現在のコルカタ）に着き、次に乗る飛行機がオーバーブッキングでキャンセルされたことがわかった。ほとんど裸電球の中で、目ばかり光る黒い男達がうごめいていた。エア・インディア総支配人のバッタチャリアさんに1日掛け合って、やっと飛行機に乗れた。その間中、私のトランクを持って順番とりをする運び屋の男達がうろうろしていた。

ダーズリンの帰りに、ニューデリーに行き、ついでに観光バスに乗って、タージ・マハルとアグラ城を1日かけて見に行った。今回よりも大気汚染が少なく、白大理石でできたタージ・マハルは夢のように美しかった。こんなすばらしいものを1度でも見ることで本当に良かったと思っていた。息子は、大学の研究室のインド人の友人が結婚するので、学生の時にインドに行き、やはり、私の話をきいていたので、タージ・マハルにいった。ただ一人取り残された夫が、今度の話を書いたときに真っ先に手を挙げたのは、そういうバックグラウンドがあったからである。

建築等に疎いおまけのおぼさんが何か書くこともないので、迷ったが、お仲間に加えていただくことにした。ヒन्दゥー教がらみの話をという要請もあったが、これはとても難しい。前回と今回に見るチャンスが沢山あったムガル帝国関連で今回新たに発見したことについて何か書くことにした。歴史もほとんど知らないのに、細かいことはわからないが、誰でもご存じのタージ・マハル以外のムガル帝国を探してみた。学校の世界史の授業で、インドのムガル帝国とは習ったが、イランに近いティムールの子孫が建てたことぐらいしか知らなかった。たまたま、満州やモンゴルの歴史に加えて、中国史、韓国史、さらには日本の古代史にも詳しい岡田英弘先生の「モンゴル帝国の興亡」（ちくま新書）の中に、インドのムガル帝国を建国したバーベルは、モンゴルの血を引いていると書かれてあった。カーンとかハーンとか名前につかないのは、チングス・ハーンの母系の子孫であったからという。そして、ムガルとはアラビアなまりでモンゴルのこととか。父系のティムールに誇りを持っていたムガル帝国の皇帝にとっては、なかなか皮肉なことでもある。また、前回訪ねたダーズリンにはチベット人の難民も沢山いたし、住民はほとんどチベット系であったが、モンゴル族がもっと本格的にインドには浸透していたとは全く知らなかった。

それでは旅行のはじまりから、ムガル帝国の匂いを探してみる。

シヴァージ



チャトラパティ・シヴァージ国際空港。2月13日（水）に我々がデリーを経て最初に着いたムンバイの空港名である。ムンバイのフォート地区に立つムンバイで最も大きいターミナル駅名は、チャトラパティ・シヴァージ・ターミナス駅。2004年世界遺産に登録された旧名ビクトリア・ターミナス駅という。2月14日（木）のムンバイ市内の見学時に何回か前を通ったが、植民地時代の代表的なゴシック様式の駅舎である。このチャトラパティ・シヴァージとは？デカン高原でムガル帝国第6代皇帝のアurangzeb帝に手を焼かせた反乱軍の首領である。西インドでマラーターと呼ばれていた家系の出身で、もとは耕作農民であったとか。ムスリムやイギリス支配に抵抗したヒन्दゥーの英雄であったとされるが、実際はムガル人たちの権力闘争を巧みに利用しながら自らの地位を確保していったといわれる。イギリスの植民地

インドのシンボルであるムンバイのインド門に挑むようにシヴァージの像がたっている。

ビービー・カ・マクバラ

2月15日(金) アウランガバードからエローラに向かう途中ビービー・カ・マクバラ(Bibi ka Maqbara) 廟に寄った。案内のカーンさんの話では、アウラングゼーブ帝が第1王妃ラビア・ドゥラーンのために造った廟であるというが、息子であったアザム・シャーが亡き母のために建てた霊廟であるともいわれている。タージ・マハルに似ているが、大理石が使われているのは墓標周辺とドームだけで、他の場所は石材に漆喰で装飾してある。総大理石のタージ・マハルと比べると、みすぼらしいところもあるが、こちらはこちらでひっそりと落ち着いていて良い。アウラングゼーブ帝亡き後のムガル帝国崩壊の兆しを象徴しているようにも思える。そして、この廟はデカン高原に唯一残るムガル帝国の建造物である。ムガル帝国でデカン高原を初めて制覇したのがアウラングゼーブであるからである。今回は行かなかったが、この近くのクルダーバードにアウラングゼーブ帝の小さな廟がある。自分が死ぬ際、自分の墓に公費を使うべきではないとして、皇帝の私費だけで墓を建てるよう家臣に命じたという。

フマユーン廟



2月18日(月) 朝9時頃ホテルを出てデリーのインド門を見た後に我々が向かったのは、フマユーン廟である。フマユーン(Humayun、1508-1556)(第2代皇



帝：在位1530-40、1555-56)はムガル帝国第1代皇帝のバーブルの子で、父の後を次いで皇帝となったが、1539年ベンガル、ビハールを中心にして起こったシュール・シャーの軍に敗れ、デリーから追われ、西インド、ペルシャに逃げ、のちにペルシャ軍の助けをかり、西北インドを回復し、スール朝をたおして、ムガル皇帝位に返り咲いたが、1556年ブラナー・キラ(古い城)の図書館の階段から落ち死亡。この宮廷はフマユーン廟の北2キロにあるが、今回は遠くから眺めただけで、中には入らなかった。フマユーンが敵を滅ぼして奪い取り、大改修して堅固で壮大な城にしたといわれている。このように悲運のうちに死んだ夫のために1565年、王妃ハミーダ・バーヌー・ベーガムは帝国で最大にして壮麗な廟をヤムナー河の近くに建設させることにした。廟はフマユーンと王妃の故郷であるペルシャ的な色彩を持ちながらインド化したムガル朝文化の特徴をもつインドで最初の巨大墓廟建築であり、赤砂岩と大理石をともに用いている点も初めてであるらしい。また、タマネギ状の大ドームを戴き、後のタージ・マハルの建築に影響を与えたといわれる。完成したのは皇帝が死んでから9年目の1565年。1993年ユネスコの世界文化遺産に登録された。タージ・マハルに比べるとサイズは小さいが、朝靄の中に立つフマユーン廟は赤砂岩の赤が映え大変美しかった。そして、また、フマユーン廟はムガル帝国の終焉の地でもあった。1857年、イギリス植民地軍の傭兵隊シパーヒー(セポイ)の反乱で、反乱軍側についたムガル朝最後の皇帝バハードゥル・シャー2世が、3人の王子と共にこのフマユーン廟に避難し、反乱が鎮圧された後、皇帝はフマユーン帝の石棺のそばで捕らえられた。帝位を剥奪され、終身年金をあてがわれて、ミャンマーへ追放されたのである。大英帝国のビクトリア女王は、この20年後の1877年、「インド皇帝」の称号を宣言。そして、大英帝国の本格的インド支配がはじまった。

ファテプル・シークリー

2月22日(金)は朝予定より早くホテルをでて、風の宮殿、ジャンタル・マンタル、アンベール城に行き、アグラに向かう途中最初の予定にはなかったファテプル・シークリー(Fatehpur Sikri)を訪ねた。ファテプル・シークリーはアグラの南西約40kmのところにあるムガル帝国第3代皇帝のアクバルが築いた都城である。アクバルは、「後宮の妃五千」といわれ、多くの女性を囲いながら跡継ぎに恵まれなかった。そこで、シークリー村に住むシェイク・サリーム・チシュティーというイスラム教の聖者を訪ねた。翌年その予言通りに皇子(第4代皇帝のジャハンギール：幼名サリーム)が誕生したので、感激したアクバル帝は、記念としてここに新たな都を建設し、アグラから遷都したのだとい

り。セスク地区の中庭に建てられた唯一の白い大理石の廟はシェイク・サリーム・ナンユティーの墓で、今でも子どもが欲しい人々のお祈りの場所となっている。

しかし、(本当の理由はわからないが)水不足と猛暑のため、わずか14年間(1574年～1588年)しか使用されず廃墟となり19世紀まで歴史に埋もれていた。この遺跡は1986年世界遺産に登録された。戦争に巻き込まれていないので、一部盗難にあってはいるが、とても建物がきれいに残されている。



フ
ア
テ
ア
プ
ル
シ
ク
ー
ー
は
、
建
築



的にはパンチ・マハルが面白いかもしれないが、私はディワニ・カースの玉座に引かれた。柱の上部の円形の玉座で、このアクバル帝が座り、宗教家や様々な賢人達が、侃々諤々議論をするのを聞いていたという。図書館から本を読みながら階段を下りて、墜落したのが原因でなくなったアクバルの父帝フマユーンは文人であったのであろうが、戦いには弱かったので、アクバルは子どもの頃から戦場において、文字も読めなかったともいわれている。戦争に強いので、ムガル帝国の発展には大変寄与した王様である。ディワニ・カースの玉座で耳学問を行っていたのかもしれない。

ムガル帝国の愛と政争

1631年南インドに出陣中のムガル帝国第5代皇帝のシャー・ジャハンは一緒につれてきた最愛の妃ムムターズ・マハルを亡くす。産褥熱であったらしい。18年間に14人の子どもを生み、その中で7人だけが育ったという。シャー・ジャハンは大変悲しみ、22年かけて、彼女のために世界で一番美しいお墓を作ったのである。そのために莫大な歳費を使い、間接的には、ムガル帝国の滅亡の一因となったかもしれない。しかし、すばらしい建物とともに、ムガルの文化は後世まで残ったことになる。シャー・ジャハンは晩年には、実の息子であるアウラングゼーブ帝により、アグラ城の1室に閉じこめられて、毎日ヤムナ河越しに、愛する妃のために作ったタージ・マハルを眺めながら悲痛の中で死んでいった。チャウハーンさんの話では、アウラングゼーブ帝はムムターズ・マハルの子であるという。同じ母から生まれた残りの男子の兄弟を3人暗殺して、アウラングゼーブ帝は帝位を奪った。これだけ愛した女性が産んだ子供に裏切られたシャー・ジャハンは、アグラ城に幽閉されながら何を思ったか。彼は死後タージ・マハルの廟の中で妃ムムターズ・マハルの隣に眠っている。アウラングゼーブ帝の唯一の親孝行であったのかもしれない。そしてこの2人の埋葬された墓だけがタージ・マハルの建物の中でただ1つ左右対称ではない。前回訪ねたときには、地下に眠る本物のお墓にはいけないが、レプリカには直接さわることができた。今回は、レプリカの周りに柵ができ、近づくことができないのは残念であった。また、アグラ城のシャー・ジャハンは閉じこめられた部屋にも入ることができなかつた。白大理石のきれいな部屋で、そこから見るタージ・マハルは幻想的で輝いていた。世界遺産になったためでいたしかたないと思うが.....



屋にも入ることができなかつた。白大理石のきれいな部屋で、そこから見るタージ・マハルは幻想的で輝いていた。世界遺産になったためでいたしかたないと思うが.....

子に対する親の愛としては、第1代皇帝のバーブルが挙げられる。彼はトルコ語で書かれた回想録を出している。彼は病に倒れた第2代皇帝フマユーンを救うために自分の命をさし上げますと神に祈り、そのお陰かフマユーンは元気になり、バーブルはほどなく死んだという。ムガル帝国は始まりから情緒的である。不慮の事故で死んだフマユーンには王妃ハミーダ・バーヌー・ベীগムがいて、立派なフマユーン廟を作らせた。その子がアクバルである。アクバルは我々が2月22日に訪ねたアンベール城のマハラジャであるヒンドゥー教徒のラージプートの女性を妻としてお迎え。イスラム教への改宗を迫らなかつた。

そしてムガル帝国を盤石なものにしていったのである。アクバルは当時インドの南西海岸にやってきたポルトガル人により伝えられたカソリックにも興味を示したという。いずれにしてもアクバルはヒンドゥー教徒を迫害しなかったのが、インドの英雄であるとされる。ヒンドゥー教徒を迫害し、イスラム教を強制したアウラングゼーブがインドでは大変嫌われているのは対照的である。しかし、アウラングゼーブはイスラム教のパキスタンでは英雄であるとされる。そのアウラングゼーブは89歳とも90歳とも言われるが大変長生きであった。ムガル帝国の版図を最大にした英雄ではあったが、最後はやりすぎたのではないかと反省していたようである。彼の敵であるマラーター家の息のかかった土地であるアウランガバードには、彼の名前が使われている。そして、前述のような質素なお墓をつくり、年老いた彼は何を思ったのであろうか？ひたひたと迫るムガル朝の衰退を感じていたのかもしれない。彼の死後、ガラガラとムガル帝国は崩れていき、デリーを中心とした小さな王国になり、イギリスの支配を受けるまで細々と長らえるだけになった。後年アウランガバードは彼が嫌っていたヒンドゥー教やジャイナ教、仏教の石窟寺院であるエローラや仏教の石窟寺院であるアジャンタへの門前町のようになり、世界中の観光客が訪れる町になった。

今回の旅行で、間接的にアクバルの影響を受けているのが、2月19日に電車で訪ねたチャンディーガルである。アクバルはアグラ城の暑さに耐えられなかったともいわれる。それがファテプル・シークリに遷都した理由の1つであったかもしれない。しかし、これも水不足であったのか、思い切って、ラホールに遷都する。アクバルの息子のジャハンギール帝の墓はラホールにある。昔の大きなインドがパキスタンとインドに分かれたときにラホールはパキスタンになってしまった。パンジャブ州の州都がパキスタンにとられてしまったのである。そこで急遽、ル・コルヴェジェらが新しい州都となる都市を造ることになる。それがチャンディーガルである。アクバルがファテプル・シークリを作り大変誕生を喜んだこのジャハンギールも最後はアクバルに反抗して、後に許されて皇帝になっている。

最近WACから出版された本で「朝青龍はなぜ強いのか？」というモンゴル学と遊牧民の大家である宮脇淳子氏によって書かれた本がある。副題が「日本人のためのモンゴル学」。彼女に言わせると、モンゴル人には長幼の序がないのだという。先輩後輩もないのである。兄弟は原則として末子相続であり、長男が財産を継ぐことも家督を継ぐこともないそうである。少し話が飛躍するが、ムガル帝国の子ども同士が例え同じ母の子であっても争って跡目をねらうのも、強いものが生き残るといふモンゴルの思想が生きているのかもしれない。ちなみに、宮脇女史は、初めに書いた岡田英弘先生の高弟にして令夫人である。昨年「世界史のなかの満洲帝国」という意欲的な本を書かれている。

あとがき

3月25日の日本経済新聞の1面に「新日鉄、海外初の高炉」というタイトルがあった。新日鉄に務めていた人から、ラクシュミー・ミタルというインド人がEUの鉄鋼会社を買収して作った鉄鋼生産量が世界一の鉄鋼メーカーが、新日鉄もねらっているということを知った。新日鉄の株をできれば売らないで欲しいと新日鉄の社長はお願いしているという。ラクシュミー・ミタルはカルカッタ出身の58歳のヒンドゥー教徒であると聞く。世界でマイクロ・ソフトのビル・ゲイツに継ぐ金持ちだとか。ヴェルサイユ宮殿を借り切って子どもの結婚式を行ったといわれる。また、3月27日の新聞ではインドのタタがフォードの「ジャガー」と「ランドローバー」を買収したという記事も見た。タタはベルシャからやってきたスーフィーであると今回学んだ。鳥葬の人たちである。ムンバイのタージ・マハルホテルを思わず思い出した。

日本のように、格差があるといってもそれほどではない国とあれだけ貧しくて乞食を職業のようにしている人がいる国で、このような世界的な大金持ちを排出する。2月16日にヴァラナシで乗ったりキ車の少年のことを思い出した。必死になって自転車をこいでいた。後ろから父親らしいやはりリキ車の運転手がいろいろと大声で教えていた。そして後ろを向いて笑った顔は本当に無邪気で可愛かった。本当は恵まれているのに、うつろな目をして生きていくのに疲れた子どもが散見されるこの頃の日本である。戦後すぐの貧しかった日本で見られた子ども達笑顔はどこに行ったのだろうか、考えさせられるインドの旅でもあった。

参考文献

インドの歴史(ケンブリッジ版世界各国史) バーバラ・D・メトカーフ、トーマス・R・メトカーフ(著)、河野肇(訳)(創元社)
読んで旅する世界の歴史と文化「インド」辛島昇(監修)(新潮社)

